

水酸化カリウムを加えて「反応」、「洗浄」、「精製」の各工程を経て100リットルの廃食用油再生燃料が作られる。

5. 導入状況
滋賀県愛知郡愛東町 H 8. 4月から稼働 月産 200～300リットル
滋賀県八日市市 H10. 3月から稼働 月産 500～600リットル
滋賀県環境生活共同組合 月産 500リットル

6. 回収実績
(平成11年度) 総回収量 16,247リットル (拠点 3,728.5リットル、官公庁等9053.5リットル、自治会等3,465リットル) 精製量 11,200リットル
これらの精製した油をパッカー車、バキューム車10台の燃料として使用。

行政部会活動

年	月	日	活 動 内 容
H 1 3	10	2	部長・副部長選出、懇談での質問について
	11	3	環境問題、市内交通アクセス等について
	11	9	市の交通対策について現在の現状を聞く（企画課）
	11	27	環境、交通アクセス、公共施設運営等の調査内容の報告
	12	14	報告についての話し合い
H 1 4	1	15	中間報告書、情報紙作成について
	2	4	〃
	2	12	〃
	2	18	〃
	2	26	〃
	3	2	〃
	4	30	活動計画作成について
	6	27	有害物質混入事件等について
	7	6	〃
	8	20	下半期の活動内容について、提言の方向性について
	8	30	直行便、目安箱、公民館使用状況等の報告
	9	17	行革の方向性について
	10	24	行革の方向性、環境問題への取り組み方について
	10	31	〃
	11	14	伊丹市クリーンセンター視察
	11	27	提言に向けての検討
	12	3	〃
	12	18	〃
H 1 5	1	14	〃
	1	29	〃
	2	3	〃
	2	6	〃
	2	28	〃

◆教育部会◆

テーマ

子どもたちの心が見えていますか

□部会メンバー□

数元 真由美 ・ 竹山 小百合 ・ 谷掛 まゆみ

谷口 睦美 ・ 山崎 登久子

□教育部会□

◎はじめに

「Aさん、学校でけんかしたったんやて。」 「Bさん、先生におこられたっ
たらしいで。」 「Cさんは、どうも学校へ行きたくないみたいや。」 「Dさん
ところは、ようおこっとしてん声がするわ。」

日ごろ、世間話で、あるいは、学校の参観日などでこういう話を耳にします。
その中には、見過ごしにできないことが含まれている可能性もあります。

私たちは、できるだけ子どもたちの本音にせまろうと、小・中学生にアンケ
ートを実施しました。そのアンケートをもとに、提言をまとめました。

【提 言】

① 週五日制は子どもにとって…

学校週五日制になって数ヶ月がたちました。

大人たちが考え実施したゆとり教育は、今の子どもたちにとって本当によか
ったのでしょうか。

アンケート自由筆記から、平日(月曜日～金曜日)の授業時間が増え、部活や学
校の行事が少なくなり、子ども同士のコミュニケーションがとれず、精神的に
疲れが増えている子どもたちの様子が見えてきます。子どもたちの「生きる力
をはぐくむため」に導入された週五日制は、全国で実施されている学力テスト
からも、学力低下の傾向が浮き彫りにされてきました。これが今の子どもたち
の実態です。

子どもたちの負担を軽減し、本当にゆとりのある生活をするためにも、平日
の授業時間を増やすことも行事のための時間をカットすることもせず、授業時
間を確保するための工夫が必要です。

どうすればいいのでしょうか

子どもたちの声に耳を傾け、週五日制を見直して、授業時間数を適切なものにし、行事の充実をはかり、子どものための週五日制になるようにしていかなければなりません。

例えば、**一年二学期制の導入、土曜日の登校あるいは選択登校**等、多様な対応が考えられます。

「子どもたちのために、今、何をすべきか」を最優先に考え、市としての柔軟な対応を望みます。

② 学校は子どもにとって…

アンケートでは「学校は楽しいですか」の質問に、小学校低学年は大半の子どもが、楽しい・先生がすき・友だちがすきと答えています。しかし、学年があがるにつれ、楽しくないと感じている子どもが増えていきます。

なぜ先生と同じことをやってはいけないのかと疑問を投げかけている子ども、先生の態度におかしいと感じている子ども、生徒を理解して欲しい・一人一人に平等に接して欲しいと訴えている子ども。子どもたちは、思っている以上に先生のことをしっかりとした目で見えています。そして、もっとよい先生になって欲しいと願っています。

行事がカットされたり、内容が充実していないことに対しても、多くの意見が出されています。今、「ひと」とのふれあいを望んでいる子どもたちの姿が見えてきます。

一方、子どもたちの生活においては、朝食をとらないというような変化がみられます。アンケートから、朝食をとらないことイコール気分が悪くなるということではないと分かりますが、成長期にある子どもたちにとって、朝食は大切なものです。

どうすればいいのでしょうか

先生は、おなじ目の高さで子どもたちと接し、おたがいにひとつの人権をもった個人であるという認識のもとに日々の生活を送ろうと努力しなければなりません。その認識は教えられたからといって身に付くものではありませんが、**常に研修**を重ねて、一人でも多くの先生が自分のこととして身につけようとして欲しいものです。

学校生活をつらく感じている子どもたちに対しては、少しでもつらさを軽減するために、よく話し合い、その結果として今よりよくなる可能性があるのなら、通学区の見直し等も含めた **現制度の柔軟な運用** を検討しなければなりません。「前例がないから」といった門前払い的な対応はせず、その子どものためにとという考え方をしたいものです。

また、自分のからだを大切にするためには、どんな生活をすればいいのかを、親はもちろん、先生も常に子どもたちに向けて発信していかなければなりません。

③ 相談機関は子どもにとって…

現在子どもたちが相談できる機関はいくつか設置されています。しかし、アンケートには、困っていることがあっても「相談したくない」「相談しても無駄だった」との回答が複数寄せられています。特に、「バカにされる・本気で聞いてくれない・相談したらしゃべられる」等の意見は、今の子どもたちの気持ちをよく表しています。このように、現在の篠山市では相談機関が充分機能しているとはいえない現状があります。学校も、スクールカウンセラーを含めて、安心して相談できる場所ではなくなってきています。

どうすればいいのでしょうか

人権を侵害された子どもや親が、安心して相談できる場所が必要です。現在の教育委員会や青少年育成センターの窓口で、親身になって相談に乗ってもらえ、早期に適切な対応がなされればいいのですが、現状では充分機能しているとはいえない状態にあります。相談するほうも、相談をしていることが下手に学校に知れたら困るという気持ちも持っています。

相談窓口の新たな選択肢として、子どもからの相談、親からの相談、先生からの相談に適切に対応できる「**オンブズパーソン制度**」が必要です。この制度を取り入れることにより、公平な第三者からの意見が、教育現場で活かされていくこととなります。

※オンブズパーソン制度

行政の任命ではあるが、それより独立し、子どもや親の立場に立って、行政へ意見する権限を持ち、活動する第三者機関

○内容は・・・オンブズパーソンや相談員が悩みを抱える子どもや保護者らの相談に応じ、解決に向けた道筋を考えていく。

教師ら関係者とも接触し、関係改善などの調整をする。

調査をした上で、市の機関に勧告や意見表明をし、改善点について報告を求めることもできる。

○既存の制度との違いは・・・子どもの話を聞くだけでも、解決策を子どもにあてがうのでもない。一緒に考える過程を通して、当事者が持つ力をみずから引き出すための支援がオンブズパーソンの役割。

さらに、いじめや虐待は個人の問題だと受け取られがちですが、関係する制度の改善などを求めることで、それらを社会的な問題だとして捉えていくのが、この機関の特徴。

(川西市子どもの人権オンブズパーソン事務局主幹

吉永省三さんのインタビュー記事より)

◎ おわりに

子どもを取り巻く人間関係、また、子どもの大人に対する信頼感、そういったものが希薄になっています。子どもたちは、少しでもふれあいを望み、その一方で、大人はうるさい、勝手だ、とも思っています。

もう一度、「子どもたちにとって、最良の教育とは」を考え直さなければいけない時期ではないでしょうか。

教育部会活動

年	月	日	活 動 内 容
H13	11	6	今後の活動について
H14	1	22	活動内容を検討
	4	9	最終提言へ向けての活動を検討
	4	23	〃
	5	21	〃
	5	28	〃
	7	9	アンケート内容の検討
	7	23	〃
	7	31	教育委員会へアンケート依頼
	8	8	アンケート仕分け作業
	8	下旬	アンケート配布
	9	中旬	アンケート回収
	9	20	アンケート集計
	11	20～	アンケート報告、内容について検討
	12	上旬	アンケート結果を教育委員会へ提出 学校へ配布、PTAへ郵送
	12	24	最終提言に向けての検討

◆福祉部会◆

テーマ

地 域 福 祉 の 充 実 を

□部会メンバー□

寺本 秀代 ・ 長澤 美紗子 ・ 畑 鈴枝

畑 美智子

◎ はじめに

急激な高齢化の進展により、健康、福祉の関心は高まっています。そして、誰もが不安を常にかけております。心身の健康を維持し「安心と信頼の健康福祉社会」を望んでいます。

篠山市においても、65歳～74歳までが約6,500人で全人口の約14%、75歳以上が約5,300人で全人口の11%を占めています。高齢化の波は打ち寄せてきています。

ひとり暮らしの高齢者も12年度は307人、13年度は456人と増加の傾向です。篠山市の介護保険認定者も現在約1,600人ですが、年々増えています。

だれでも歳を重ねるうちに、できるだけ介護保険のお世話にならず、家族に迷惑をかけずにいたいと願っています。

そこで

上記の状況・思いが各地域で「地域の福祉活動（ボランティア活動）」として篠山市の社会福祉協議会の指導もあり、市内の14カ所で「ふれあいいいきききサロン」＝グループサロンとして定期的開催されています。

一方、自発的に福祉活動としてグループサロンが開催されている地域もあります。

これら地域の福祉活動として開催されているグループサロンを実地見聞させていただいたり、聴き取り調査をさせていただきました。この調査の結果が、「地域福祉の充実」そして、「地域福祉のまちづくりの基」となることを願っています。

次に介護保険制度が導入され3年が経過しようとしています。はじめは、「老後の安心をみんなで支えあう制度」の考えからの出発でした。今は市民にも制度そのもの、内容、手続き等が大まかに理解されつつある段階です。

介護保険を利用している利用者の中には、不満や問題点もあちらこちらで聞こえてきます。今年は介護保険制度の見直しの時期です。聴き取り調査した内容が「老後の安心をみんなで支えあう制度」として市民が理解できることを願っています。

安心と信頼の健康福祉の地域社会の中で、篠山市に住んでよかったといえる地域福祉社会の充実に努力したく、まとめたことを提言に繋げます。